

幼児教育と小学校教育の架け橋は何を目指しているのか

岩田恵子, 大豆生田啓友, 鈴木美枝子, 田澤里喜, 田甫綾野, 宮崎 豊, 若月芳浩

The Goal of Bridging Early Childhood and Elementary School Education

Keiko Iwata, Hiroতোমো Omameuda, Mieko Suzuki, Satoki Tazawa, Ayano Tampo,
Yutaka Miyazaki, Yoshihiro Wakatsuki

Tamagawa University Research Institute, Machida-shi, Tokyo, 194-8610 Japan.
Tamagawa University Research Review, 28, 23-35 (2022)

要 約

このシンポジウムでは、文部科学省の「幼保小の架け橋プログラム」は何を目指しているのか、これからの乳幼児期の教育・保育はどういう方向が大切なのか、小学校がこれからどう変わり、その小学校とどう連携していく可能性があるのかを、幼児教育、特別支援教育、小学校の実践にかかわる立場から話題が提供され、検討された。

Abstract

The symposium was attended by early childhood, special needs and elementary school educators. After reviewing the goals of “The Early Childhood and Elementary School Education Bridging (KAKEHASHI) Program” advocated by The Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT), educators discussed their perspectives on the desired direction of development of early years education and daycare, changes expected in elementary school education and how early years educational institutions and daycare centers can collaborate with elementary schools.

キーワード：幼保小架け橋プログラム、特別支援教育、対話

Keywords : The Early Childhood and Elementary School Education Bridging (KAKEHASHI) Program, Special education, Dialogue

〈本シンポジウムの概要〉

本報告は、玉川大学学術研究所 K-16 一貫教育研究センター幼児教育グループが企画し、2022年2月25日に開催した研修会「幼児教育と小学校教育の架け橋は何を目指しているのか」をまとめたものである。シンポジストに、学校法人渡辺学園認定こども園うゆうのもり幼

保園長、港北幼稚園長、文部科学省 幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会委員の渡邊英則氏、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所インクルーシブ教育システム推進センター上席総括研究員(兼)センター長、文部科学省 幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会委員の久保山茂樹氏、横浜市立恩田小学校校長、元横浜市

こども青少年局担当課長幼保小連携担当（教育委員会兼務）の寶來生志子氏を迎え、コーディネーターは、幼児教育グループの大豆生田啓友が務めた。

〈シンポジウム報告〉

はじめに

大豆生田啓友 このシンポジウムでは、文部科学省の「幼保小の架け橋プログラム（以下「架け橋」と表記）」¹⁾は、どういう方向を目指しているのか、これからの乳幼児期の教育・保育は、どういう方向が大事だということなのか、小学校がこれからどう変わり、その小学校とどう連携の可能性があるのかを検討していく。「架け橋」は、最初のメディア報道などでは、小学校に入る準備として年長に共通のプログラムを作成することが伝えられたため、そういう目的だと思われているケースがあるが、そうではないことを明らかにしたい。

幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会で議論されていること

渡邊英則 「架け橋」とこれまでの幼保小の連携をはじめとした接続期の話、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の議論などと何が違うか。今回の特別委員会のメンバーは、28人中、保育現場の人間が4人くらいで、幼児教育の外部の人たちに本当にどこまで幼児教育をわかってもらえているかという課題を感じている。幼保小の連携というと、「小学校の先取りをしたほうが良い」「一斉の授業に慣れさせる」「小学校に行って困らない」という話が一般的な傾向としてある。しかし、そのような連携では、いろんな子どもたちの姿、多様な子、配慮が必要なお子さんのことも認められない懸念がある。また、小学校の先生と授業の姿も含め、子どもの育ちについて深く話す機会がほとんどない現状もある。幼児教育の外部の人たちに本当に乳幼児期って大事だということ言うべき会議だということが徐々にわかってきた。

既に議論してきたところでは、架け橋期のカリキュラムの開発がある。カリキュラムの開発という言い方がとても難しいが、どういう形で小学校と幼稚園、保育所、認定こども園とが接続していくかを丁寧に考える話である。対象は0歳から18歳の学びを意識し、5歳児から小学校1年生について今まで言っていた接続期と少し違って、年長の1年間と小学校の1年間を続けて考える。

この「架け橋」のカリキュラムの開発の手引きを作成する際、面白かったところは、トップダウンではなくて、ボトムアップという形で、様々な地域で様々な状況の中で、よりよいものを模索していくという形になっていることが、文部科学省として画期的である。

改めて幼児教育とは何かが問われていると感じる。小学校にわかしてもらえないと言う前に、保育所も幼稚園も認定こども園も様々にある中で、各施設がバラバラの保育、教育でいいわけではない。この検討会を進めていくと、日本の子どもたちをどう育てるかという議論の場であると思う。ボトムアップと言ったように、文部科学省が決めておろしてくるというのではなく、それぞれの地域で「幼児教育って大事ですよ」と小学校の先生たちと話し、子どもたちってこうですよということが話し合えるような動きを日本中に埋め込むという流れを作っていくのがよいと考えている。

幼児教育に関わる人全てが、その重要性を社会、特に小学校や行政の人に訴える、その一番の「架け橋」は何かといたら、入口という意味では年長から1年生だが、1年生で終わりではなく、小学校以上の教育がどう変わっていくか、どんな子どもを育てようとするか。今までのように、ただ決まったことを教えればいいのではなく、教育のありよう、カリキュラムという考え方、評価の考え方を改めてこれからの教育の中で考えていこうというところの、ひとつの通過点として「架け橋」があるのではないか。

特別支援教育の視点から幼児教育を考えてみると…

久保山茂樹 保育所、こども園、幼稚園の先生方と一緒に学ぶことが大好きで、特別支援教育の立場から、幼児教育と特別支援教育が融合することによって、インクルーシブな保育になり、保育の質が向上する、そういう学びを今いろんな現場でしている。

幼稚園教育要領の中に前文が入った。実は小学校、中学校、高等学校、特別支援学校、全ての学習指導要領に新しく入ったが、本当に素晴らしい文章で、「自分のよさや可能性を認識する」これが土台である。それがあって、「あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働」すると書いてある。そういう子どもたちはやがて「持続可能な社会の創り手となる」と続く。次の要領の改訂までの10年間、これが教育の方向性ということをしかり示している本当に素晴らしい文章で

ある。

これは、これからの教育、保育の方向性は共生社会の担い手を育むところにあると思う。この共生社会の担い手を育むということを、みんなの合言葉にすることが、保育の質、あるいは授業の質を上げていくことにつながるのではないかと私は勝手にそう思っている。

今まで出会ってきた園の中には、「うちの幼稚園は障害のある子はいませんよ」と言い切ってしまう園長先生が経営している園がある。あるいは5歳児の秋になって、退園せざるをえない子どもがいる園が存在している。ものすごく悲しいことだ。多分、出て行けとは言っていない。けれども状況的に、居にくい空気を作っている園が、残念ながら存在している。一方で、そういう園から、入園転入してくる子どもを受け入れている園や、先生や、子どもたちも存在している。

特別な支援が必要な子どもの在籍というのは保育所、こども園、幼稚園それぞれで、かなり偏りがある。公立の園では、約3割が特別な支援が必要な子ども、この夏出会った幼稚園では、「私のクラスは5割の子どもに支援が必要」という話もあった。「架け橋」をかけると言っても、保育所、こども園、幼稚園の実態にかなり差があることを常々感じている。

いろんな園を拜見してきて思うのは、園の保育の質によって、特別な支援が必要な子どもが在籍している割合が異なっている。あるいはその園の保育の質によって、多様性が経験できるか否かということにかなり差がある。保育者主導の保育、あるいは設定活動中心の保育、あるいは行事中心の保育をしているような園では、均質な集団が求められているように思う。特別な支援が必要な子どもが過ごしにくい、結果辞めざるをえないという状況が起きている。あるいは周りの子どもにしてみれば、特別な支援が必要な子どもと生活した経験がないとか、あるいは乏しいという状況が起きている。その園としては均質な集団で、計画通りに保育が進んで、何事もなく前に進んでいるだろうと思うが、本当にこれからの社会を生き延びる子どもにそういう保育でいいのだろうか。

一方、子ども主体の保育、あるいは遊び中心の保育、柔軟さのある保育をしている、そういう園では多様性のある集団が確保されている。特別な支援が必要な子どもも、過ごしやすい。そして周りの子どもも、そうした子どもたちと生活した経験がある、あるいは豊富ということが起きている。

幼稚園教育要領に即した保育をしているような園で

は、多様な子どもが安心して過ごせる環境、関わりがある。ところが、要領に書かれている以外の内容を取り入れている園の中には、子どもが困ってしまうような環境や関わりがある。少し挑戦的な物言いになるが、保育の質に課題があるにも関わらず、保育がうまくいかないのはあの子のせいだ、あの子の特性のせいだとしている園があるように思う。

子どものせいにされて、子どもが何とかしなくてはならない。子どもの変化が期待されるという中で、今、児童発達支援は非常に満員御礼な状況が起きている。そして並行通園が起きている。週に3回も別々の児童発達に通っている。児童発達の次の日は、ちょっと子どもが荒れているという声を聞くことも、残念ながらある。保育所等訪問支援もあるけれども、その良さもありながら、療育と同じことを園の保育に求めてしまう担当者もいる。「どうして療育ではできないのに園ではできないのでしょうかね」というような、きついことを言われる。園の保育者は非常に混乱しているが、保護者は必要なので、「ぜひ療育のとおり、園でもやってください」ということが起きている。園の保育が、非常に混乱する。

そもそも児童発達支援の目的は何だろうか。私はその子のよさを伸ばすためにあるはずだと思っているが、一方で、集団に適応させるためという大きな目的を掲げているような児童発達支援がある。適応しなくてはならない集団って何なのだろうと思う。そういうことを求めている園があるからなのではないかなという気がする。

特別な支援が必要な子どもたちの配慮については、合理的配慮が必要ということが今いわれ、どのような配慮をしたほうがいいか、この子に何をしたらいいかということが問われている。でも合理的配慮ということを経験するときにはいつも思うのは、合理的配慮そのものをどうしようとしてもきりが無い。むしろ大事なものは、合理的配慮を提供する基礎的な環境整備がどうであるかということをしっかり考えるべきだろう。

例えば車椅子ユーザーのAさんが、明日皆さんの園に行きますよというときに、B園はスロープがある、段差がない、お手洗いも車椅子対応になっている。その子が入るクラスは1階であるというような形で、基礎的な環境が整っていれば、車椅子ユーザーであるAさんが来ても、それほど合理的な配慮はなくても済む。しかし、あちらこちらにでこぼこがある、段差がある、お手洗いの対応もできていない。Aさんが入るクラスは2階にある、エレベーターが付いていないということになると、

Aさんが入るために合理的配慮はものすごくたくさんしなくてはならない。

同じようなことは、自閉症のある子ども、知的障害のある子ども、聴覚障害のある子どもでも起きている。特別な支援が必要な子どもが来るからさあ大変とって、合理的配慮を準備するということもあるかもしれないが、そもそもいろいろな子どもが来て大丈夫のような環境を整えておくという事はできないものだろうか。

先生が日々、いろんな子どもが来て大丈夫な、例えば自閉症のある子どもが来て大丈夫のように、突然大きな声を出さない、急に予定を変更しない、無理やり子どもの遊びを中断しないというようなことを丁寧にやっていれば、自閉症の特性があるAさんがある日来て、合理的配慮はそれほど必要ではないかもしれない。

こんなふうと考えてみると、今私たちがしなくてはいけないのは、あの子にどうする、この子にどうするというを一生懸命考えることよりも、むしろ園としての環境、言い換えれば保育の質をどれだけ高められるかということである。

アメリカの特別支援教育の研究者たちによって、特別な支援が必要な子どもが来ると個に応じた支援、つまり合理的配慮のところ目が行ってしまうが、それより前に日頃の保育の質、カリキュラムがどれぐらい調整できるか、子どもたちが生活の中で学ぶ機会があるかといった基礎的な環境が大事だということが言われている。

支援が必要な子どもも、周りの子どもも育つような保育をみんなで目指していきたい。それが質の高い保育だと思う。それは子ども一人一人の得意を生かすということ、幼児期から自己肯定感を育むということである。できないことの改善よりも、手持ちの力で今できることを認める、豊かにする関わりということをみんなで大事にしていく。そうして幼児期にしっかり心に芯になるものを育てるということを、みんなで、どの子どもにもしておくということが、小学校に入学してから大きく伸びていく基礎になるだろうと、私は信じている。障害があろうとなかろうと、その子なりの姿があっていい。

特別な支援が必要な子どもがいて、そういう子どもに保育者が様々な関わりを試みていく、その姿によって周りの子どもたちが育っていく。私もやってみようという子どもたちが、あらわれる。幼児期は共生社会の担い手の芽生えであり、小学校に行き、中学校に行き、自分から動ける子どもになっていく。私はそのような姿をたくさん見てきた。

一人一人の子どもを大切にするとはどういうことか。例えば園庭の真ん中に陣どって独りぼっちで遊んでいる。こういう子どもを見たときに、1人でしか遊ぶことができないと見るのか、それとも1人で遊ぶことができる子どもと見るのかでは、この子を見るまなざしは全く違っている。周囲で鬼ごっこをしている、サッカーをしている、なのに仲間に混ざらないことを、社会性がないと言わないで、1人で黙々と遊びこんでいる姿をしっかり認めていくということが必要だろう。

この子は、実は、砂をすくってはきれいに型抜きができないかなと、30分も40分もやっている。こういう姿をじっくりと保育所、こども園、幼稚園で大切にしてくれることによって、この力は小学校できっと伸びていくだろうと思う。これを障害のある子どもだからこうしなくては、仲間に入れなくては、とやることで、大事な芽をつぶしていないか。夢中になって遊んでいると、やがて子どもたちが近寄ってくるということもあるわけで、無理して多数派に合わせる必要はない。

最後に、支援が必要なお子さんの話をひとつしたい。これから子どもたちはお昼の時間なので手を洗っているが、この子はどうしたらいいかわからなくて座ったままだった。先生が声をかけようとして近付くと、1人の女の子が手を洗う列から戻って来て、この子の隣に並んで、背中をトントンと叩いて教えた。ふだんの保育者の日常の姿は周りの子どもにうつっていく。子どもが、共生社会の担い手としての歩みを始めている。

園の中にはこういう保育をしている園もたくさんあり、この中で、小学校でぐっと花開く力を身に付けているのかなと思っている。

幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会で話されていること

渡邊英則 「幼保小架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）」について話したい。これまで3要領・指針の整合性を確保し、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を作ってきたという成果はあるものの、それが本当に資質能力をつなぐカリキュラムの編成、実施につながっていないということが課題となっている。幼児期の終わりまでに育ってほしい姿が、到達目標に誤解されて連携の手がかりとして十分機能していない。スタートカリキュラムと、アプローチカリキュラムとがバラバラで、理念が共通していない。このような課題があり、「架け橋」

の中で解決していこうとする議論がされている。

「架け橋」のモデル地区としては12地区、今、公募がかり、様々なところが手をあげている状況を聞いている。3年間、プログラムをやってみようとしている。ただ、モデル地区だけが実施するわけではなく、全国的にも取り組みをしていきたい、いろんなところでやってくださいという構図になっている。

文部科学省として画期的だったと感じるのは、「架け橋」の取り組みの構成員として、様々な人を想定していることである。幼稚園、保育所、認定こども園、小学校はもちろん、教育委員会、子育て担当部局、教員等養成や研修に関わる大学専門校・幼保小の関係団体、保護者や地域の関係・有識者、架け橋期のコーディネーター（有識者）等があがっている。

この中で形式だけの議論をしても駄目で、様々な立場から意見や事例を出し合って話し合おうという試みである。幼保小の先生が、気楽に話し合える関係づくりに必要なことは何か、全ての先生が関わり、継続的に取り組むためには、現場のモチベーションや創意工夫を引き出すためには、現場を孤立させずリーダーシップを発揮して適切な支援をしなくては必要がある。また、成果を普及し、地域内の幼保小の連携、接続を強化していくためには、まちづくりの中でどう取り組んでいくか、子どもたちの意見も取り入れながら、みんなで架け橋期の教育のことを考えようということが目指されており、これが本当にできてくるといいなと思っている。

関係者の中で大事にしたいことは何かということは、資料を読めばもちろん全部なのだが、ただ個人的に強調したいのは、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿は、子どもに資質能力が育まれていく過程で見られる、生活の姿を総合的に示したものである。

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿は、決して到達目標ではなく、日常の子どもの実態を示したものであり、主体的対話的で深い学びの充実をはかるまさに手がかりとなるものである。この使い方がどこまで小学校の先生方にわかるかというのは、小学校の先生たちが10の姿というものの自体に親しくないで、そこが難しいところである。けれども小学校の教育が変わってくると、10の姿がまさに生かせるのではないかと思う。

そしてこのようなことを考えるとき、よく架け橋期だけを考えるが、実はその前の3歳、4歳、0、1、2歳も子どもたちが主体性を発揮していること、それからこのような姿が1年生で終わるわけではなく、その後の学び

のプロセスの基礎になっていくということを考えていく。さらに、特別な配慮が必要な子ども、障害のある子どもや外国人の子どもなどを含めて、全ての子どもの可能性を引き出すためということにも大事なことが示されている。

プログラムを実施する視点としては、幼保小の教育のつながりを意識した活動が、子どもの豊かな体験を生み出し、主体的対話的で深い学びの実現につながる。この主体的対話的で深い学びというのが何かというのがとても大事である。一人一人の子どもが、本当に自分でやりたいことを見つけて、そこの中で探求していったり、友達と関わったりしながらいろんな学びを生み出していくというような教育のありようは幼児教育も小学校教育も大事にしなくてはいけないことである。

この「架け橋」は、1年生の先生と年長の先生だけが関わればよいのではなく、学校は学校、園は園として、全ての先生たちが関わる中で、その中で持続的発展的な取り組みを目指そうとしている。この後お話しする寶來先生がいらした学校では、スタートカリキュラムの1年生に取り組んだ先生たちが、例えば4年生5年生になっても、授業が変わったと聞いている。子どもの声をちゃんと聞こうとすることを、1年生の授業でやっている先生が、学校全体の中で様々な授業のやり方、もっと子どもに任せるような形で授業を展開していくことを伺うと、ただ「架け橋」のその時期だけ取り組むという話ではない。

ICT、オンラインの活用というところで、先生同士の連携もあるが、例えば、朝顔などただ描くのではなく、写真に撮るなど、いろんなところで子どもたちがICTの機器を文房具みたいに使おうというのがあってよいのではないか。もっと子どもたちが使いこなせるような、そのような姿も、幼児期でもあってもいいし、小学校でもあっていいかなと思っている。

それから形式的な取り組みにしない。家庭や地域も一緒に幼児期の終わりまで育ってほしい姿を手がかりに、子どもの姿を起点に話を深めましょうということも載っている。こんなことを意識しながら、各地域で架け橋期の対話的な取り組みというのを進めていけたらいいかと思っている。

「架け橋」カリキュラムの開発における工夫の例という中で、幼稚園、保育所、認定こども園のことは今日参加の皆さん知っている方が多いと思うが、小学校は、学習指導要領で教科も決められており、やることがいっば

いあるから難しいとなりがちだが、そうではない。小学校でも1人の児童の学びや個別の教科内に閉じたものではなく、それぞれの学びが相互に関連付き、つながりあっている。こうしたことを踏まえて主体的に自己を発揮し、新しい学校生活を作りだそうとする児童の姿を実現するための方法として、生活科を中心とした合科的関連的な指導の工夫が求められる。またこうしたことが個別最適な学びと協働的な学びの充実ともつながる。このことを再認識しながら検討することが大事であり、小学校にも求められている。

小学校、乳幼児期の幼児教育も、みんな育成すべき資質能力は同じ基盤がある。幼児期に育てるべき資質能力は何か。小学校で育てるべき資質能力は何か。中学校で育てるべき資質能力は何かと言いながら、3つのトライアングルがちゃんと成り立っている中で、アクティブラーニングが大事になってくる。

ここからは少し「架け橋」の議論から離れるが、自分がこの本に出会ってすごく勇気付けられた、奈須正裕先生の『個別最適な学びと協働的な学び』（東洋館出版社）という本を紹介したい。山形県天童市立天童小学校の実践が載っている。

1年生から自分たちだけで学ぶ、学びあう。先生は後ろにいて、子どもたちが前に出て授業をすることもある。マイプランでは、自分の学習を組み立てて、それで計画して、どう学んでいくかということ、自分たちで考えながら進める。フリースタイルプロジェクトでは、自分の興味関心を生かし、学ぶ内容や方向、計画を自分で決めていく。教科書も資料なので、いろんな教科書の中で一番わかりやすいものを選ぶ。図書室に行く。様々なことをしながら、自分がやりたいことをどう調べて、それをどう学んでいくか、自分なりに考えていく。子どもたちの声を聞く。子どもたちがこうやろうと思っていることを、先生たちが支えるというやり方をすると、授業がとても効率的になる。

これは配慮が必要な子どもにとっても、自分のペースでやっていいということが支えになる。今まで、小学校の中でみんなにそろえる、みんな同じことを同じようにできるようにする、教師は、平均的な子よりちょっとできないぐらいのところまで授業をすると、できている子はとても時間が余り、できない子は結局それでもわからない。けれども、自分たちでやると、あっという間に効率的に自分たちで学んでいったりする姿もある。子どもたちに任せてみると、子どもたちが自ら学ぼうとする、子

どもたちが自ら自分たちで育とうとしているということが、小学校の実践としてあったということが、すごくうれしかった。

奈須先生の本の対談の部分で、こう書かれていた。内容中心の従来の学習指導要領は、まず教科があって、それをたばねたものが教育課程となって、それをどうやって子どもに教えていくかという発想だった。今回はその順序を逆にした。まず有能な学び手としての子どもがいる。子どもは学ぼうとしている。その子どもがどう学び、育っていかうとしているのかという事実があって、それをより洗練されたものにするためにはどんな教育課程が望ましいかが見えてきた。その結果として教科があり、個々の学びがあるという関係で考えている。子どもたちが学ぼうとしていること、そのことを支えることが、ある意味で教育課程になっていく。子どもが先である。

教員は、これまでコンテンツを教えれば、子どもがこう育ちますと言われてやってきた。それがこのように子どもが学び育っていく、最終的にはコンテンツも身に付くという話でいくと、これが10の姿となる。自分たちのやりたいことを夢中でやっている、その中に探求心、協働性が出てきた。子どもはこうして育とうとする中で、一生懸命学んでいく中で育つものがいっぱいある、その方向を示すことができれば、結果的には大人が教えようとしていたことをちゃんと身に付けていく。そのような教育が、これからは小学校にとってはとても大事である。

それが中教審の出している答申に沿っているものだと述べていることが、この本の面白さでもある。このような教育をやらうとする小学校の先生たちがいるなら、幼児教育はそういう先生たちを支え、そういう子どもたちを、どう小学校に送り出すかというのが問われてくると思う。

一人一人の子どもを大事にする、子どもの主体性を大事にするという保育をしたいというような動きが増えてはきている。それが保育の質の向上にもつながってきている。配慮が必要なお子さんももちろん大事にされるというところで、一人一人が本当に何を学んで、何をして育とうとしているかということが、保育の質になってくる。この流れは、これからの子どもの育ちを見据える小学校にも波及していく。つまり小学校でも先生主体ではなく、子ども主体の教育に変えていくことになる。このことを小学校がやらうとしたときに、1年生から6年生まで突然できるわけではなくて、入口としては「架け橋」だと思う。

園で保育を変えようとして、先生が決めたことをただやっているだけではなく、子どもの声を聞きながら、子どもの遊びを大事にしながらいは結構大きな話になる。今までの固定概念を変えなくてはいけない。「架け橋」プログラムを全国的にやりますと言っているけど、幼児教育側が、子どもの主体の教育をあまり考えていない人で話し合ったら、「やはり1年生になるまでには座れるようにしてもらったほうがいい」とか、「ちゃんと先生の言うことを聞けたほうがいい」という話に終わってしまう可能性もある。幼児教育の中で何を大事にして、子どもたちを育てるかというのを、幼児教育側が発信していくということが大事だと思う。

特に保護者もそうである。保護者が園を選んだりするわけだから。さらに小学校に幼児教育の理解者を増やせるかどうかによって、対話しようとメンバーを集めて委員会を作ったとしても、全く違ったものになってしまう危険性もある。「架け橋」がこれからどうなっていくかというところでは、大きな課題である。期待もするけれども、本当にうまく行くためには、幼児教育側も様々に考えなくてはいけないと思っている。

幼児教育と小学校教育に虹を架けよう

寶來生志子 なぜ幼保小をつなぐことが大切かを考えていくとき、各々の教育の充実が必要だと思っている。そしてお互いの理解が欠かせない。今日は、小学校がどんなふうになっているかということと話したい。

今年の4月から恩田小学校に異動した。学校づくりのビジョンとしては、「令和の日本型教育」にもたくさん載っていた、子どもを育てる学校から、子ども自らが育つ学校にしたいと思っている。安心して自己発揮できる学校を、周りのみんなと一緒に作っていききたいということと、子どもを徹底的に大切に、伴走者になりたい、この人に伴走してもらいたいと思ってもらえるような教職員でありたいと話している。

コロナなので、できないことが多いが、「これならできそう」というふうに、前向きに考えるということと、子どもたちの安心を大切にすることによってやっている。子どもにとって安心することは何かと考えたときに、それは私たちの笑顔や共感のまなざしだと思う。子どもは安心しなければ自己発揮できない。安心感が子どもたちの意欲や主体性、そして学びに向かう力を引き出すことにつながっている。

それにはまず、先生方、私たちが広い心、そしてゆったりとした心で子どもたちと接することが大切だと思っている。子どもは学ぶ意欲と学ぶ力を持った有能な学び手であると言われている。その子ども理解を周りのみんなですていく、笑顔で接していくというふうにしていきたい。

つまりどれだけ子どもの立場に立てるかということだと思う。子ども自身が興味関心を持っているとき、その子の持っている最大限の力が発揮されると言われているので、そういう意味でも興味関心を大切にしたい。

私が最初1年生を持ったときには、小学校になったから、「はい教えてあげるよ」と腕まくりしている感じだった。今は、年長のときまでのことを土台にして、幼児期で培った力を土台にして小学校につなげるという意識を大切にしている。特に小学校の先生の発想の転換が鍵だと思っている。ゼロからのスタートじゃないと思ってほしいといつも言いまわっている。

学びに向かう力を育てるには、手応え感覚、心理学でいうとポジティブ感情が大切だと思っている。これは幼児期も小学校ももちろんそうだが、私たち大人もそうかなと思っている。価値ある体験を通して、気付きが生まれてそこで手応え感覚が育まれる。それがあると、それが次の行動の意欲になって、それを何度も経験すると、安定して、少々困難なことにあってもがんばるぞと思えるような学びに向かう力を培っていける。価値ある体験をどれだけ子どもたちに環境として用意できるかなということを、学校でもみんなで話している。

久保山先生、渡邊先生がおっしゃっていたような、特別支援に配慮する子どもたち、「困った子ね」ではなく、「何でこんなふうな行動をとるのかな」と「困っている子」と捉えることもスタートカリキュラムでは大切にしている。そして、学習する子どもの視点に立つ教育活動に転換するために、子どもに聞くということが大切だと思っている。

そしてスタートカリキュラムは、アクティブラーニングでやりたいと思っている。幼児期の学び方と児童期の学び方を行きつ戻りつしながら、4月1日になって急に変わるというのではなく、子どもが主体的に自己を発揮できるようにする場面を意図的に作るのが、スタートカリキュラムだと思っている。

今日登壇されている渡邊英則先生から言われた言葉がある。「寶來さん、考えないスイッチが入らないようにしてね」と。遊びを通してみんな自分で考え、自分で判

断し行動している。そういう子たちが、学校に入学すると、手はおひぎ、指示されたことに従う、そういうことがいい子だって思ってしまったら、せっかく考えるスイッチが入っていたのに、考えないほうのスイッチが入ってしまう。それはもったいないよねというような話をいつも聞いていた。だから「考えないスイッチが入らないようにね」というのも、みんなに言っている。単に動き回るといっても、頭の中がくるくる動いているアクティブラーニングにしていくことだと思う。

スタートカリキュラムは、今までの第1ステージというのは、小1プロブレムのことを解決するために、学校に子どもを合わせるようなものが、多かった。第2ステージからは、私も作成にかかわった『スタートカリキュラムスタートブック』にもあるように、子どもたちの生活の流れを大切にしようとなり始めた。

今回の第3ステージのスタートカリキュラムは、①生活科を中心とした合科的・関連的な指導、②弾力的な時間割の設定、③「10の姿」を踏まえたスタートカリキュラムを工夫して、生き生きと学びに向かう子どもを目指すことが大切とされている。

そのためには、これまでの子どもたちの育ちを尊重する本気の質問、「あなたたちのことを知りたいよ、聞かせて教えてね」「みんなで考えようよ」とか、「園ではどうだったの」「どうしたいの」「何でそう思ったの」というふうに子どもが考えるということを大切にするような本気の質問、子どもに聞くことを大切にすることと、園での学びを生かした活動を大切にすることが大事だと思う。

小学校のスタートカリキュラムをデザインするとき、今やっているのは、まず登校して身支度をした後にあそびタイム、友達と誘いあって自由に遊べる時間をとっている。こうすることで、どんな感じの子どもかなというのを見ることもできるし、子どもたち同士が自分の好きなものなので、強制される感じではない。園での登園したときの雰囲気似ている。担任も連絡帳を見るゆとりができて、子どもにも担任にもいいなという時間がある。

次がなかよしタイムである。安心を作る時間で、あいさつ、元気かな、歌ってスキンシップ、読み聞かせという4つがプログラムとしてだいたい定着してきている。歌ってスキンシップも、踊りながら歌う子もいれば、周りで見ている子もいる。「踊りなさい」「何でやらないの」ではなく、全部知らないと踊りたくない子もいるだろう

から、「楽しかったらきつと後からだいぶたってから踊るだろう」みたいな気持ちで、みんな一緒なのがいいというふうにしない。さらに、生活科を中心とした学習活動がわくわくタイム、教科等を中心とした学習活動をぐんぐんタイムと呼んでいる。

全校で1年生の育ちを支援するというで、朝会で私が在校生に向けて、1年生の子どもたちの育ちや関わり方について投げかけた。それを保護者にも学校だよりで発信した。入学式の次の日の休み時間に行ってみると、子どもたちが後ろから、「うちの子どうしているかしら」みたいな感じで、自分の兄弟とか登校班の子どもが、どうやっているかとても気になって、見に来ていて、とてもかわいいと思った。

こういう場合、ともするとやりたくなくて、1年生ができるのに全部やってしまいそうな気がしたので、次の朝会のときに、「1年生は赤ちゃんかな」という話をした。「赤ちゃんじゃないよね」という話で、「何でこうなのって質問されたときに、それはねってすぐ教えないで、何でそう思ったのって言うてみるといいよ、そうしたらきつと答えを知った1年生はやっぱりって言うと思う。やっぱりというのは、頭でちゃんと予想しているから言えるよねって。そんな感じの関わり方にしてね」という話をした。

あとは、個に応じた環境の工夫ということで、写真なども多用する。そして教室の後ろにたたみを置いて、絵本コーナーを設けてクールダウンもできるようにしている。10の姿の共有で、近くの園の保育参観をさせていただいて、その後10の姿をどんなところで見られたかというようなこともしている。

そして就学時健診などで、私のほうからスタートカリキュラムというのをやっているから、「早くしなさい」「こんなことしたら1年生になれないよ」というようなおどしをしないで、「今の園の生活を十分楽しんでくださいね」ということを、親に話している。

今日も午前中行ってきたのだが、園での子どもの様子を見せていただいている。園で自分が自己発揮できる場所でどんなふうに進んでいるかというのを見せてもらったり、好きなこと、得意なこと、困ったときどんなふうに対応していますかということ、ご家庭はどんな感じですかということを知りたりした。特に好きなこと得意なことを聞くことで、小学校の単元にも生かせると思っている。

私たちだけではなく他の小学校の先生たちも、「みんな

なが入学するのをすごい楽しみにしているからね、あと1カ月ちょっとだけ楽しんでね」と今日も言ってきた。まずは1人で入学してくる子どもがいる園から始めている。やはり不安があると思うので、そういうふうにしたほうがいいのかと思っている。

最後に前の学校のときの、入学から2日目のコロナ前のビデオを紹介したい。教室の前にプールがあって、プールの中を見たくて水を抜きたいなどいろいろ考えた子が、それは許可があるのでという話になって、校長先生に言わなくてはいけないのではという話をしていて、行こうとしていたところ、私が廊下から歩いてきて、廊下で授業が始まった。この子どもたちとの対話から、子どもは自分の持っていることを総動員させて学ぶのだということを改めて思っている。

〈質疑応答〉

質疑応答の時間には、多くの質問が寄せられ、豊かな対話が生まれた。紙幅の関係で、抜粋して紹介する。

●質問「障害の程度にもよるかと思うが、園と併用した療育は必要なのか」

久保山「答えはとても慎重でなくてはならない。ケースバイケースだと思う。私個人の考えからいけば、療育は行かねばならない場所ではないはずだと思う。その子にとって通う意味がある、価値があるから行く。集団の中でずっと過ごすことで疲れてしまう子どももいる。自分のペースで、自分のしたいことをやる時間が確保できるという点で、そういう意味での療育はとても意味がある。ただやり方によっては園でもできる。今どんな園に通っていらっしゃるか。そしてお子さんの発達の状況にもよる。」

渡邊「療育の先生は、1対1で丁寧に、例えばちょっと苦手なことを訓練ではなく教えてくれるのは、上手だなと思う。うまく併用できたり、担任と療育の先生もいたりといういろんな見え方の中でこの子のこういうところいいよねとプラスになればいい。訓練になって、そこに行かなくてはいけない。それから療育に行かせればできます、園ではできないのはおかしいというのは違う。」

●質問「幼児期の終わりまでに育てほしい子どもの姿をどう捉えるか」

久保山「全体としての捉えの部分と、それから一人一人の子どもの捉えの部分というのは分けて考えたほうがい

いと思う。10の姿というのはあくまでも園や学校全体として捉える、ひとつの共通言語として全体として捉えるものであって、個々の姿は、それはそれでしっかり個別に引き継いでいくということをするべきだろうと思う。当てはめるものではないという理解をしている」

渡邊「小学校の先生が保育所に行って、2歳児のところ朝顔の咲いているところを見て、2歳児がすごく大騒ぎしているところを、こんなに言葉で伝えようとしている、感動している、数を数えている、と子どもが育っている姿を発見していた」

大豆生田「この10の姿の使い方が、どこができていないかとかみたり、日々ICTが進んでいくと、今度は毎日10の姿をチェックしたり、子どもの姿を見ているのではなく、10の姿から子どもを見ることになってないかという問題提起が大事だと思う」

渡邊「できるかできないかでチェックリストで作ったら、子どものできないところばかり気になり、それをどうやって直すか、どう訓練するかの話になる。けれど子どもってこういうところがいいところだとか、この子こんなに夢中になって、こんな素敵なことに会おうんだとか、その子らしさを発揮するとか個性を発揮する。豊かな環境があったら、自分が本当に夢中になって、「この子、車のことだったらこんなに知ってる」ということの中で、ここで言葉も出てくる、人との関係も出てくるというように、子どもの育ちをちゃんと語り合うときの、その視点としての10のツールである。チェックリストに使ってしまったら、使わないほうがいいのかという感じになる。」

寶來「10の姿は、到達目標でないということがいろんなところで書いてある。到達目標となったらとても大変な、子どもたちにとっていい10の姿ではなくなる。到達目標でなく、自発的な活動としての遊びを通して、一人一人の発達の特性に依拠して育っていくものであり、全ての幼児に同じように見られるものでないことに留意する必要があると書いてある。目の前の子どものほうを大切にしたいほうがいい。」

大豆生田「本当にこの10の姿が到達目標ではないというところは何度も言う必要がある」

●質問「言葉でうまく表現できない子どもが排除されない学びは、保証されるか。幼児期までの自分の気持ちを言葉で表すことが必須条件として求められるだろうか」

久保山「これは幼児期から、自己表現、自分を表現する手段は音声言語だけではないということ保育者がしっ

かり認識する。話し言葉で表現できなくても、身体で表現する、絵で表現する。絵が上手なお子さんたくさんいる。どんな表現でもそれをあなたの表現として認めるということを、幼児期にしっかり経験して、そしてそれを小学校につないでいくということ。卑近な例で恐縮だが、うちの息子は小学校低学年の間、ほとんど学校でしゃべらない子だったが、生活科の発表があるというので見に行ったら、矢印の棒を持って突っ立っている。すらすら読めるお子さんが、模造紙に向かってしゃべっている様子を、今ここを読んでみますと示すのが息子の役割で、僕はうれしかった。それはその子の役割をきちんと果たしている。そういうことは今学校でもやってくれるのではないかなって期待している。」

大豆生田「とてもわかりやすく大事なお話ありがとうございます。その子が話し言葉が「できない」というふうに見るのか、それ以外のところで、様々なその子の「よさがある」のかが受け入れられるかで、全然変わってくる」

●質問「子どもの様子を見て、園児が話し合いで決める姿を見て衝撃を受けたので、もう少し詳しく教えてほしい」

渡邊「卒園児が、学校でけんかが起こったときに、先生が握手をさせて、はい仲良くしなさいで終わると言っていた。仲良くしなさいで終わるんだけど、私たちは何でそうなったかとか、この人にこれをわかってほしいとか、ちゃんと話し合いをしたいのに、話し合いをしてくれない。形だけでおしまいというのが納得できないみたいな話があった。授業の中でもいろいろな意見が出るから学びが深くなっていく。そういう話し合いってそもそも幼児期から、子どもたち真剣になっていろいろ話し合いをしていくという、その力をもうちょっと信じていいのではないか。それは幼児教育側も考えておかないと、みんな一緒に同じような形式的なことでやろうとする子どもばかり作っていたら、小学校行って意見を言いなさいって言っても誰も言えなくなり、同じような意見しか言わなくなってしまうような授業になっていく。」

寶來「横浜の園のキュウリを育てているんだけどカラスからやられそうになってどうしようって話し合いをして、その結果CDみたいなキラキラを付けたということを、他都市で生活科と総合のところ为例を出したら、「生活科の上を行っているね」とコメントがあった。だから知らないって恐ろしいと思う。小学校で、話し合いを

していない、運動会の競技も先生が全部決めてしまうというのは、本当に逆行している、すごく悲しい。園の先生たちの素敵な保育をもっと小学校が知らないといけない。」

大豆生田「このテーマ、久保山先生がおっしゃった一人一人の個性が尊重されることと、そのことをやっぱりみんな大事にするということにもつながる大事なテーマではないかと思う。」

●質問「保幼小の連携会で、保育者が幼児期にどのようなことを経験したほうがよいですかと小学校教員に聞くと、「座れる練習をしてください」「自分の名前は書けるようにしてください」「書き順はくせが付いてしまうので正しくしてください」など、できる、できないなどの結果ばかりの回答について違和感がある」

寶來「私はいつも自分が研修担当のときに、こども青少年局の幼保小連携担当のときには、こういうふうな座れる練習をしてくださいとか、そんなこと言うような人がいたら、言ってくださいといつも言っていた。そのぐらいいまだそういう人が隠れているかもしれないからと言っていたら、本当に電話がかかってきたことがあった。まだそのような人がいるのかもしれないので、「それ違っているよ、そうじゃない」って言っていましたよ、「この前研修会で」って、ぜひ言ってほしいなと思うし、私に連絡してくれれば、何とか間を取り持ちたいと思う。」

久保山「形を整えることに力を注ぐのか、それとも子どもが聞きやすい、これなら大丈夫と思える環境を整えるのかということを考えるのか。小学校だってできるはず。2年生ですが、12時15分で、梅雨時に子どもたちの集中が限界というときに、机を後ろに持っていきなさい。お椅子だけ持って集まろうよ。指をくわえているのとか髪の毛を触っているのとか寝転がっているのいまずけれど、でもそれでみんな先生の話聞いているんだから、形はどうでもいいじゃないかという、こういう「お互いの何を大事にするか」ということを確認しあう学びが今必要なのだと思う。そしてそれが今始まっているように私は思っているの、それを期待している。」

●質問「渡邊先生から各施設がバラバラの保育、教育でいいわけがないというお話があった。例えば一斉保育中心か、自由保育中心なのか、平等重視か個性重視かなど、園としての教育観や教育方針は、現状では園次第であると感じている。こうした教育観や教育方針の違いは、同

様に小学校でも言える。つまり、保育段階の教育観と、小学校段階での教育観に関して、園と学校、もしくは教師間のこうした教育観や教育方針が合致していればいいが、合致していないことが多いように感じる。そのような幼小のマッチングによる弊害が子どもに見えないストレスを及ぼしていることが多い。こうした幼小のマッチングについて、また架け橋期のカリキュラムそのものを可能とする行政や園・学校組織の枠組みの変革、組織の教育観や教育方針を合致させていく方向に向けて、段階的にどのように変化させていくのかに関して、今後どのような取り組みが現実的だと思うのか、ご意見を聞きたい」

渡邊「横浜の幼保小の連携は結構歴史があるが、うまくいってなかったことも結構ある。形式的にやっていたこともある。ただ小学校の先生方でわかってくれる人がいるというように、お互いの顔が見えてくるというのがやはりとても大事だろうと思っている。本当に難しかったのが、例えば小学校の先生、新卒というか1年目に入った先生が、昔は各幼稚園とか保育所に1日か2日行ったんですが、一斉活動のすごい園に行くと、あんなに幼稚園ですごいことやっているっていう先生に出会うと、こちらは胸が痛くなった。やはりいろんな園があり過ぎてという話でいくと、そういう園の子たちが本当はどう育っていくのかというのを、どこかできちんと検証していくというのが大事だと思っている。今日の小学校でのお話で、一生懸命考えて意見を言う子というのは、遊んでいる園の子であってほしいなと思っている。言われたことだけやっている子は多分何やっていいかわからないとか、どうしていいかわからないとなったときに、言われたことだけやっている子たちが、主体性を発揮できるのかというような、そういう子どもベースでの育ちの話をきちんと小学校としていく。小学校は、こういうことが大事だといったときに、情報も集まり、先生同士の研修もあり、こういうことって大事だよねという共感してくれる人たちがじわじわ増えてくる。そのとき幼児教育側はどうするのか。保育所、幼稚園、団体も違い制度も違う。それでいいのかという話になってきたときに、そうではないよねという流れが、「架け橋」をきっかけにできたらと思っている。」

最後にそれぞれひとことメッセージを述べていただき、会が締めくくられた。

久保山「将来のことが気にならない人はいないと思うが、どの子どもも、今ここで懸命に生きているんだということを基本にしたいと思っている。障害があろうとなかろうと、その子の姿をやはり大事にするということをやった、こんなふうに大事にしてきたよということ子どもが見えないリュックサックの中にそれぞれの担当者が入られて、ちょっとずつ増やして行って大人になって行ってほしいと、理想ですけどそんなことを思っている。自分自身が「架け橋」にならなくてはとも思った。ありがとうございます。」

渡邊「架け橋プログラムの中で、幼児教育の大事さということ、いかに幼児教育以外の人たち、小学校も含めて伝えていくかということ、考えさせられた。架け橋プログラムが今度いろいろな地域で始まるとするならば、現場の方たちが本当に身近な小学校と連携を深めていくこと、これをやっていくことが、子どもたちのためには、とても大事だと思っている。自分の保育をきちんと人に伝えることを、園の中だけ、幼児教育の世界だけではなく、外側にも伝えていくという努力をみんなですていくということが、意味があるかなと思っている。皆さんのいろいろな参加の仕方、「架け橋」に関わっていただけたらありがたいと思う。今日はありがとうございました。」

寶来：ありがとうございました。久保山先生のプレゼンを見て、自分が今思っていることと同じと思ったことが、環境と関わり、それが保育の質の向上につながると書いてあったこと。小学校でも自由に選べたり学べたりする、自分の興味関心が発揮できるような環境を作って、先生たちがやらせるのではなく、自分たちが育ってもらいたい。子どもは有能な学び手だと捉えれば、教え込むというのではなく。伴走者として、私たちのほうの受容的な関わりがキーワードだと思う。「架け橋」のときにも関わりと環境を大切に、これからもやっていきたいと思う。ありがとうございました。」

大豆生田「ありがとうございました。本当に3人の先生方のプレゼンと皆さんとの対話を通して、かなりの側面に関してお話できたと思う。本当に学びの時間をありがとうございました。今日の話の中で、ボトムアップだ、つまりこれは対話なんだと。制度的にはいろいろ課題はあるが、でもそうではあっても、そこを対話からどう始めていくか、乳幼児期の教育・保育の大事さということをきちんと伝えられるかということも含めて、対話よ広がれと思いつつ、今日の先生方のお話を伺った。」

〈本シンポジウムの考察〉

本シンポジウムのテーマのひとつであるスタートカリキュラムは寶來氏が「第1ステージ」とする「小1プログラム」解決のために始まったものとされる。

この第1ステージにおける接続・連携は子どもを学校に適応させる方向性にあったが、第2ステージになると「子どもたちの生活の流れを大切にしようとなり始め」（寶來氏）、その流れを引き継ぎ、第3ステージへと移行する。が、今回のシンポジウムはこの「第3ステージ」および今後の議論が中心となっている。

このスタートカリキュラムの第2ステージから第3ステージに移行する過程上には、2017年の幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領（以下、幼稚園教育要領等）と小学校学習指導要領の改訂（定）がある。

2017年の幼稚園教育要領等には「幼稚園教育において育みたい資質・能力」（幼稚園教育要領）（以下、「資質・能力」）や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（以下、10の姿）が示され、これらに関しては本シンポジウムでも多様な意見がみられる。

「資質・能力」は就学前施設だけでなく、その後の、小、中、高校との連続性の中で育まれていくものであり、一方の「10の姿」は幼児期に「子どもに資質能力が育まれていく過程で見られる、生活の姿を総合的に示したもの」（渡邊氏）であり、小学校では「「10の姿」を踏まえたスタートカリキュラムを工夫して、生き生きと学びに向かう子どもを目指すこと」（寶來氏）であり、ともに架け橋においても重要なキーワードになる。

これらのことについては小学校学習指導要領には次のようにある。

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより、幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して生まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすること。（中略）特に、小学校入学当初においては、幼児期において自発的な活動としての遊びを通して育まれてきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるよう、生活科を中心に、合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定など、指導の工夫や指導計画の作成を行うこと。

これは保幼小接続・連携に関する文言になるが、「10の姿」、「資質・能力」に関しては前出した内容と同じ方向性と言える記述がみられ、さらに「自発的活動としての遊び」を通しての学びや育ちを接続するよう示されたことも大変重要なこととなる。だからこそ、この遊びに関しては本シンポジウムでも以下を代表として多くの発言があった。

「子ども主体の保育、あるいは遊び中心の保育、柔軟さのある保育をしている、そういう園では多様性のある集団が確保されている」（久保山氏）

「園で保育を変えようとして、先生が決めたことをただやっているだけではなく、子どもの声を聞きながら、子どもの遊びを大事にしながらというのは結構大きな話になる」（渡邊氏）

「遊びを通してみんな自分で考え、自分で判断し行動している」（寶來氏）

「（10の姿は）自発的な活動としての遊びを通して、一人一人の発達の特性に応じて育てていくもの」（寶來氏）

これらの発言は幼児期における「自発的な活動としての遊び」の中には多くの学びや育ちがあり、それを小学校が受け止めてスタートをすとした小学校学習指導要領が示した方向性と合致する。

その一方で課題もある。そのひとつは「保育所、こども園、幼稚園の実態にかなり差がある」（久保山氏）と指摘をされたように就学前施設の保育内容等が園によって大きく異なることであり、これに関しては「（架け橋を）幼児教育とはいっても、子どもの主体の教育をあまり考えていない人で話し合ったら、「やはり1年生になるまでには座れるようにしてもらったほうがいい」とか、「ちゃんと先生の言うことを聞いたほうがいい」という話に終わってしまう可能性もある」（渡邊氏）との危惧にもつながる。

小学校校長でもある寶來氏は小学校1年生の教育において「幼児期で培った力を土台にして小学校につなげるという意識を大切にしている」と発言をしている。しかし、久保山氏が指摘するように就学前施設によって「かなり差」があるのであれば、小学校が土台にすることは難しい。だからこそ、就学前施設において幼児期にこそ育むべきことを改めて問い、小学校につながる土台を検討することが小学校への架け橋を作る第一歩となるのではないだろうか。そして、その一歩が「小学校でぐっと花開く力」（久保山氏）を育むことにつながっていくのであろう。

もうひとつの課題は「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿が、到達目標に誤解されて連携の手がかりとして十分機能していない。スタートカリキュラムと、アプローチカリキュラムとバラバラで、理念が共通していない」(渡邊氏) ことである。理念が共通するためには就学前施設の関係者と小学校の教員等がお互いをより理解することは欠かせない。

本シンポジウムの最後に司会から「(いくつかの課題に対して) 対話からどう始めていくか、乳幼児期の教育・保育の大事さということをきちんと伝えられるかということも含めて、対話よ広がれ」(大豆生田)との発言があった。今後も様々な場で異なる立場の人が集まり多様な対話をしていくこともこの架け橋が充実するための重要な要素となるだろう。

その対話を基盤とし、「各々の教育の充実が必要だと思っている。そしてお互いの理解が欠かせない」(寶來氏)この発言が一部の地域だけでなく全国的な実践となることを期待したい。

最後に、ここで目指される実践、対話のありようについて、考えておきたい。本シンポジウムでの「架け橋」をめぐる議論から示されていることは、子ども観、そして授業や「学び」への構え、捉え方が大きく転換していることである。従来の授業、また一部の保育では、授業や保育の実践とは、教師が教えるものであり、教師が教えられるべき知識を準備し教室に持ち込み、子どもには、

その知識を効率よく伝えるという学習観が見られる。ここでの子どもの姿は知識を教師から授けられる受け身の存在であり、小学校から保育所・幼稚園への要望が、「45分座ってられるように」「先生の言うことを静かに聞くことができる」であることを、いまだに耳にすることや、「10の姿」が到達目標と捉えられてしまうことは、このような子ども観、学習観のあらわれと捉えられる。

しかし、今回紹介された授業や保育実践では、支援の必要な子どもも含めて、生き生きと学んでいる子どもの姿がみられた。このような有能な学び手としての子どもの姿は、教師が、子どもと対話をしながら保育、授業を行なっていること、また子ども自身が学んでいけるような環境を構成していることが基盤にある。すなわち、教師が一方的に伝達するのではなく、教師も子どもと共に、対話をしながら、創っていく学びのありようが見えてくる。お互いの実践を味わいあう対話が深まり、互いの実践が充実していくなかでは、この子ども観と学習観の大きな転換が進んでいくと捉えることができる。

注

- 1) 「幼保小の架け橋プログラム」については、文部科学省の以下のホームページに最新資料が掲載されている。
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/1258019_00002.htm (2022年9月9日最終閲覧)